

ムササビ形埴輪の意味

— 動物埴輪にこめられたもの —

東京学芸大学 日 高 慎

1. 形象埴輪の種類

埴輪は、弥生時代後期の吉備（今の岡山県）を中心に発達した特殊器台・特殊壺から発展した円筒・壺・朝顔などが最初期に登場した。その後、様々な形の埴輪が作られるようになったのだが、家や鶏などが最初に登場し、その後大刀や靫などの器財、水鳥や猪・馬などの動物が登場し、最後に人物埴輪が登場する。6世紀になると、関東地域にしか見られないものとして、帽子や弓・矛などの器財も加わる。動物もムササビや猿、魚など類例がほとんどないものも登場するようになる。形象埴輪の種類を大まかに示すと以下のようになる。

- ①家（入母屋・寄棟・切妻・片流れ・竪穴建物・木樋形など）
- ②器財（大刀・靫・靫・盾・蓋・翳・高坏・壺・椅子・帽子・船・甲冑・弓・矛・石見型など）
- ③甲冑に顔面をつけたもの
- ④盾に顔面をつけて冑を合せたもの
- ⑤男子（盛装・武装・平装・盾持ち・馬曳き・農夫・楽人・鶺鴒人・鷹飼人など）
- ⑥女子（盛装・平装・母子像・機織形など）
- ⑦鳥（鶏・水鳥など）
- ⑧馬（飾り馬・鞍馬・片手綱・裸馬）
- ⑨その他の動物（犬・猪・鹿・猿・牛・魚・ムササビなど）。

以上のように様々な形象埴輪があるわけだが、本発表では動物埴輪を中心として、それぞれの意味を説明したい。特に、類例のない千葉県成田市南羽鳥正福寺1号墳のムササビ形埴輪は、出土した当時（私は大学院生）に印旛郡市文化財センターの方々と意見交換をした。なかなか難しいけれども、その意味を考えてみたい。

2. 鶏・水鳥・鶺鴒・鷹飼

鳥の種類としては、鶏・鶺鴒・鷹・雁・鴨・白鳥などがあり、鶺鴒あるいは鷺などの首の長い鳥ではないと言われる資料もある（賀来2009・2017など）。

鶏は動物を象った埴輪のなかでは最も古く登場し、埴輪頂部に置かれていた。人物埴輪が登場した後も、人物の近くあるいは別の場所に置かれるなど、それぞれの場面で違う意味があったように思われる。『古事記』の天岩戸神話には、鶏が常世長鳴鳥として登場し、アメノウズメ命の舞とともに、天照大神を呼び返す。鶏が、太陽を呼び返す存在、あるいは朝を告げる鳥であることを意味しているのだろう。

水鳥は鶏の次に古く出現する動物の埴輪である。大阪府藤井寺市津堂城山古墳などでは、中鳥からまともに出て出土している。埴輪丘外の周濠内で、水に浮かぶ小島に水鳥が羽根を休めているかの様な姿である。これらの水鳥は、白鳥・雁・鴨などを表現していると考えられる。筆者が関わったものでいうと、埼玉県行田市埼玉瓦塚古墳出土の水鳥は2体あり、1体は赤い焼きであったが、表面に白土を塗っており、白鳥を表していたと考えられる。もう1体は小型で白っぽい焼きのものであった。首から顔面付近は嘴以外が欠失しているものの、前述の白鳥とは異なる種であった可能性もあろう。白鳥の他には、雁・鴨類があったようなので、これらのいずれかであった可能性もある。稚拙さがめだつので、幼鳥という評価もできるかもしれない。これらの水鳥は、後述の鶺鴒や鷹のような狩猟をおこなう鳥ではない。

群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳では鶺鴒の埴輪が出土している。嘴には魚が咥えられており、魚を捕えた瞬間を表現している。首に紐および鈴がつけられており、鶺鴒の場面である。これは狩猟との関わり

で理解すべきと思われ、食物としての魚を、その捕り方を表現することで象徴的に示したのだろう。なお、八幡塚古墳では腕にとまった鵜の表現もある。まさに鵜飼人の埴輪である。鵜の埴輪や鵜飼人埴輪などは全国で20例ほど知られているようで（賀来2017）、大阪府高槻市今城塚古墳の家形埴輪の軒先の線刻画や熊本県和水町江田船山古墳の象嵌大刀や三重県多気町石塚谷古墳の象嵌大刀にも存在する。王権儀礼のなかで重要であったからこそ、大刀に刻み入れたのだろう。

なお、東京国立博物館所蔵の埼玉県神川町出土の埴輪鷹という資料があるが（東京国立博物館1986）、これは加藤秀幸が述べたように鵜の埴輪であろう（加藤1976）。私自身は東博在職中に埴輪鷹として展示していたが（現在も鷹としている）、嘴と尾の先端はいずれも復元であり、首に紐をつけている姿から鵜とすべきものである。

いわゆる「鷹匠」といわれる人物埴輪がある。どのような階層の人を表現したのかというと、着衣の様子や全身像が多いことを考えると、表現されたのが首長層とも思われるが、類例は少ない。仮に首長層とすると鷹匠というのはネーミングとして不適切で、鷹飼いや人とするべきなのかもしれない。いずれにせよ、狩猟との関わりで理解すべきものだろう。

以上のように鳥は、人間が飼っている鳥と自然界の鳥の両方が表現されていると思われる。そこには、狩猟をおこなう鵜や鷹などの鳥も存在した。文献にみられる鳥取部や鳥養部について考察した志田諄一は、鳥取部がオオハクチョウ・ハクチョウを捕獲し、鳥屋に入れて餌づけをして姿を整えた後に貢上して天皇や皇妃・皇子の玩物にしたり、池に放たれて鳥養部によって飼いならされたりしたと述べた（志田1970：pp.189-198）。

雁・鴨類は食用としての鳥であった可能性もあるが、白鳥・鶴・鷺などについては、食用と考えるよりは、水辺に生息する生き物を埴輪として表現し、さらには鵜や鷹を含めて、首長（被葬者）がこれらの鳥類を所有しているということを示しているのではないだろうか。この点は、ムササビを考える上で

も非常に重要な視点だと考えているので、改めて後述したい。

3. 馬の埴輪

馬の埴輪には、飾り馬、鞍馬、片手綱、裸馬という馬装の違いがある。飾り馬が最も上位の存在であり、飾り馬にも馬具の豪華さという点で違いがある。特に同一古墳から出土した複数の馬の埴輪には明確にそのような違いが表現されているようである。馬は古墳時代中期に、朝鮮半島から日本列島に渡来してきた動物である。それまでは『魏志倭人伝』にあるように、日本列島に馬や牛などはいなかった。

酒巻14号墳では西側から裸馬→飾り馬→蛇行状鉄器に旗を挿している飾り馬→詳細未詳の馬（飾り馬か？）の順に馬曳き人物（男子）を伴って並べられていた。斉藤国夫はこれらの違いについて、幼馬から軍馬へと成長していく姿を表したのではないかとし、詳細不明の馬は死を表現していて、馬の一生を表したという注目すべき見解を述べている（斉藤1989）。蛇行状鉄器は、関東地方で出土しているのは埼玉県行田市將軍山古墳のみである。將軍山古墳からは馬冑も出土している。いずれも朝鮮半島由来の渡来系資料であり、そのような器物を馬形埴輪に表現していることは、酒巻14号墳の被葬者が渡来人であり、將軍山古墳の渡来系資料と深く関わった人物であった可能性もあろう（日高2015）。

石川県小松市矢田野エジリ古墳のものは類例の少ない騎馬像である。騎馬像は関東地域に数例が確認されているが、近年の発掘調査で出土しているものはほとんどない。類例が非常に少ないことから、被葬者のパーソナリティーが騎馬埴輪に表されているのだと考えている。騎馬像の類例は全国各地で17例以上が知られており、飾り馬で盛装人物である場合は前方後円墳に並べられていた傾向があり、面繫や手綱のみのような簡便な馬装で人物も簡便な服装である場合には円墳に並べられていたようである（南雲2019）。

横坐り用の馬具を備えた馬形埴輪も確認されている（杉山・井上・日高1997）。特に、近年確認された栃木県下野市甲塚古墳のものは、出土した4体の

馬のうち最も豪華な馬具が装着されたものに、横坐り用の足置きが表現されている。これは、女性専用の馬具と考えられるので、私は甲塚古墳の被葬者が女性であるからこそ、最も豪華な馬が女性用なのではないかと考えている。機織形埴輪（女性）の存在、女性埴輪の数の多さなども、被葬者が女性であることを示していると考えている（日高 2015・2016）。

茨城県小美玉市舟塚古墳からは破片を含めると 3 個体、伝承では騎馬像が出たという話もあるので、それを含めると 4 個体である。騎馬像および破片の 1 個体は馬装がよく分からないので除くとして、比較的残存状況の良い 2 個体についてみると、報告書（佐々木・忽那編 2015）の馬 1 は f 字形鏡板、胸繫には鈴と馬鐸、左側に壺鐙、右側に短冊形水平板、尻繫に剣菱形杏葉と馬鐸、馬 2 は胸繫に鈴と馬鐸、左側に壺鐙？、右側に短冊側水平版、尻繫に素環杏葉を垂下する。この 2 体の馬は少なくとも尻繫の飾りに違いがみられ、相対的に馬 1 の方が優位な馬装といえる。いずれにしても、横坐り馬が 2 体あるというのは 18 例ほど知られているなかで他に類例がない。横坐り馬が出土している他の事例でも、数体ある馬の内横坐り馬は 1 体である。

前述の甲塚古墳では、4 体の内 1 体が横坐り用、和歌山県和歌山市大日山 35 号墳では、東西造り出しと出土位置が異なるものの少なくとも 3 体の内 1 体が横坐り用、群馬県伊勢崎市雷電神社跡古墳では 4 体の内 1 体が横坐り用である。甲塚古墳では前述の通り最も豪華な馬装の馬が横坐り馬、大日山 35 号墳では東造り出しの馬 1-1 が横坐り馬だが、西造り出しの馬 5-1 の方が優位な馬装といえそうである。雷電神社跡古墳では馬 1 が横坐り馬であり、胸繫に馬鐸という特徴は最も優位な馬装であるが、2 体の騎馬像は胸繫に円形飾りをつけるだけである。横穴式石室からは男性の副葬品である可能性がある挂甲が出土している。

舟塚古墳の形象埴輪群で、馬は全体像が分かるものでは女性用 2 体である。騎馬像があったとして、どのような馬装だったのか知りたいところである。女性用が 2 体あるというのは他に類例がないが、舟

塚古墳の箱形石棺の被葬者は若い男性が想定されており、挂甲も出土している。男性被葬者の古墳の埴輪になぜ女性用の馬が複数個体あるのか、なかなか結論は出せないが、わざわざ女性用の馬を作るには理由があったはずである。舟塚古墳の被葬者との関わりの中で、女性用をあえて 2 体も表現する必要があったのだろう。全国各地で出土している馬形埴輪のほとんどは、横坐り用ではない騎馬用の馬や裸馬・駄馬であり、横坐り用の馬は例外といってもよいくらいの数しか出土していないのである。

馬形埴輪の意味とは、豪華な馬具をつけた馬から鞍をつけた馬、裸馬・使役用の駄馬に至るまで、あらゆる馬を首長（被葬者）が所有していることを示していると思われる。そして、その姿は被葬者の生前の活動と極めて密接に関わって作られていた可能性がある。前述の通り、酒巻 14 号墳の旗挿しをつけた馬、甲塚古墳の横坐り馬などは、被葬者の生前の活動を端的に示していると思われる。

4. 狩猟場面を表現する犬、猪、鹿と狩人

群馬県伊勢崎市境町上武士天神山古墳からは猪 2 体と犬 1 体、見返りの牝鹿と思われるものが 1 体あり（文化庁の重要文化財指定では犬となっている）、狩人の存在は未詳だが、狩猟対象獣としての猪とそれを追う犬という巻き狩りを表していたと考えられる。鹿は角がないので牝鹿と思われ、音に敏感な鹿が振り返っている姿である。これも狩猟対象獣と理解しておきたい。

同様な場面は、群馬県高崎市保渡田Ⅶ遺跡でも確認されており、狩人は腕先が欠損しているが、弓矢をつがえている表現と思われ、腰には象徴的に猪が吊り下げられている。猪には鏃が表現されており、そこから流れ出す血まで表現されている。巻き狩りの様子を示している。

巻き狩りの対象獣は猪ばかりではなく、鹿もその対象であった。群馬県高崎市太子塚古墳では狩人は未詳だが、牝鹿の左胴部に鏃が表現されており、そこから流れ出す血まで表現されている姿は、保渡田Ⅶ遺跡のものと同様である。牝鹿を弓矢で狩る様子なのだろう。

全国の事例を集めると、猪と鹿はほぼ同様の数であることが分かっている。日本列島において多くの地域で猪狩り、鹿狩りが行なわれていたと考えられる（日高 2015）。装飾付須恵器にも同様の場面が小像として表されている。また、弥生時代の銅鐸絵画の中にも、同様の場面が確認できる。極めて重要な儀礼であったことがわかるだろう。

狩人の埴輪の腰にぶら下っている造形には、猪が表現されている。両足を上に向けてウリボウのような線刻がある造形と両足を下に向けたものがあり、大塚和義は前者をウリボウすなわち幼獣で、後者は成獣をシンボリックに造形したと理解した（大塚 1998）。卓見であり、腰にウリボウをぶら下げているのは、幼獣を持ち帰って飼養することを表しているのだろう。

文献史料には、猪甘部あるいは猪養というように登場するが、これらは幼獣の猪を飼育して大きくすることを目的としていた（瀧川 1971）。飼育した猪は、成獣となったら食用として貢上したのであろう。鹿については、文献には鳴き声を聞く、土地の神が白い鹿として現れる、神祭りの料物として角・皮を納めるといったことがでてくる。鹿だけが特に神聖視されて稲と結びつくことについて、岡田精司は毛色の変化や角の生長・脱落が稲の季節的变化と対応していることを示した（岡田 1988）。そして『万葉集』第 16 巻 3885 にみる乞食者の歌には、狩人の前に現れた鹿が体の各部分を指しながらその役割を歌っており、岡田は「角のついた鹿の毛皮を身にまとして、語りつつ舞う芸能として演ぜられた姿」（岡田前掲：p.147）と述べたのである。

鹿の角がある被り物をつけた人物埴輪が、近年茨城県下妻市千種 B 3 号墳で出土した。著名な茨城県桜川市青木出土の跪く人物（重要文化財）も、同様の被り物をつけている。また、鳥取県北栄町土下 210 号墳の女子埴輪は、鹿の子模様がついた服を着ている。何らかの儀式的場でそのような姿で登場し、舞い踊っていたのだろう。

私は、猪と鹿の意味について、猪は負の存在（凶兆）であり鹿は正の存在（吉兆）であると評価した。

また、猪は多産であり鹿は 1 頭しか出産しないという違いもある。つまり、猪と鹿はすべてにおいて正反対の存在であり、本来的には埴輪として両者を表現することが望ましかったのではないかと理解したが（日高 2015：pp.46-47）、猪だけの例や鹿だけの例もあるので、被葬者との関わりのなかで選択されたのかもしれない。

5. ムササビなどの動物埴輪

ここまで、鳥、馬、狩猟場面の動物埴輪などについて説明してきた。動物埴輪としては、他に猿・牛・魚・ムササビなどが確認されている。これらの埴輪についてどのような意味があったのか難しいが、基本的に被葬者の所有物を表していると考えている。被葬者の生前の活動と何らかの関係があった、と考えることができるのではなかろうか。

猿は、著名なものとして重要文化財の伝茨城県行方市沖洲大日塚古墳出土品があり、その他にも今城塚古墳や奈良県天理市小墓古墳など少ないものの類例がある（今西 2018）。大日塚古墳のものは背中に剥離痕があり、おそらく子猿を背負っていて、少し振り返るようなそぶりを見せていたのだろう。

群馬県前橋市後二子古墳出土の円筒埴輪には口縁部近くに親子の猿が造形されていて、親猿は下を向いている。同じトレンチからは犬形の土製品が出土しており、剥離痕から上方を向いて貼り付けられていたようである。おそらく、これらがセットになって、円筒埴輪を木にみたてて下から犬が吠えかかっている様子を表現したものと思われる。

牛は、馬と同様に古墳時代中期以降に日本列島に渡来してきた動物である。当初から畑を耕すために導入されたと思われるが、兵庫県朝来市船宮古墳の牛は鼻輪の表現がある。類例は少ないが、近畿地域と関東地域で 14 例が知られている（基峰 2017）。破片になってしまうと、他の動物と区別ができないだろうから、西日本でも類例はあるだろう。牛の役割としては乳利用と農耕が考えられるが、特に 6 世紀以降には耕作に欠かせない動物として使役されていた。平安時代以降になると牛車もあるが、古墳時代には車輪そのものがなかった（加藤 1993）。朝鮮

半島から渡来した最新の生き物・技術を、被葬者が所有していることを示したのではなかろうか。

魚は、現在の利根川流域周辺で主に確認される埴輪である（若松 2008）。ムササビ形埴輪が出土した千葉県成田市南羽鳥正福寺 1 号墳でも魚が出土している。先にみた鵜飼いの表現と同様に捕食の対象であろうが、その種類については河川を遡上する鮭や川を泳ぐ魚類を表していたのだろう。ボラ・ウグイ・コイなどが候補として挙げられている。

ムササビは、千葉県成田市南羽鳥正福寺 1 号墳だけで発見されているものである。もちろん食用ではなく、その姿は飛膜を広げて滑空する様子を表現しているようである。

猿を含めて、類例の少ない埴輪はその地域に生息している動物の日常的な姿を造形していると思われ、被葬者が治める土地の豊かさとともに様々な動物を所有しているという意味、あるいは被葬者とつながりが深い動物であったため表現されたのだろう。

6. 動物埴輪の意味

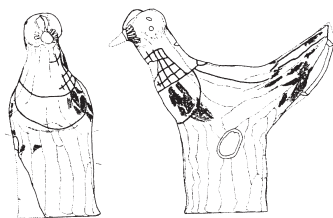
形象埴輪は、外に晒すことを目的に立てられたものである。堤の上や墳丘の側面、低い前方部上など、外から見られることを意識して置かれていた。私は「公の芸術作品」と呼んだ（日高 2013）。副葬品が主体部に秘匿されたのに対して、埴輪が外部に置かれたのは見せることを目的としていたはずである。

動物埴輪は、水鳥、馬、ムササビ、猿などは所有していることを示していて、犬や猪・鹿、鵜飼、魚、鷹飼などは狩猟そして獲物を主要なテーマとして作られた。鶏は異なる意義があったようで、結界のように世界を分ける意味があったのかもしれない。これらを外部に晒すことにより、被葬者の生前の活動・儀礼などを表したのではなかろうか。

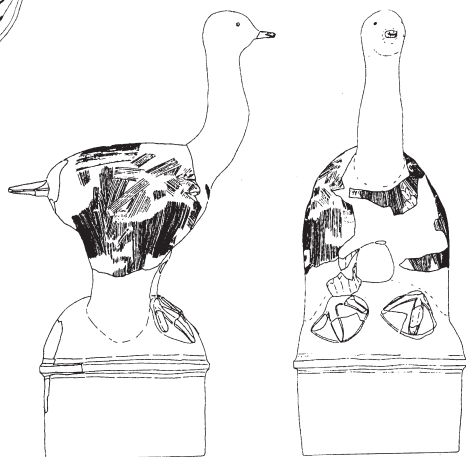
引用文献

今西康宏 2018「畿内の猿形埴輪」『埴輪論叢』 8 pp.87-100
大塚和義 1998「イノシシの魂を所持する人物埴輪の考察」『時の絆 道を辿る』 pp.537-548 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会

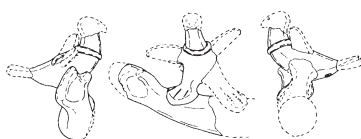
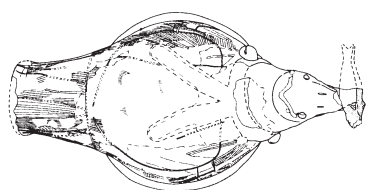
岡田精司 1988「古代伝承の鹿」『直木孝次郎先生古稀記念会 古代史論集 上』 pp.125-151 塙書房
賀来孝代 2009「鳥形埴輪の表現」『埴輪研究会誌』 13 pp.19-32
賀来孝代 2017「古墳時代の鵜と鵜飼の造形」『古代』 140 pp.81-104 早稲田大学考古学会
加藤友康 1993「「くるま」の比較史」『アジアのなかの日本史Ⅵ文化と技術』 pp.91-112 東京大学出版会
加藤秀幸 1976「鷹・鷹匠、鵜・鵜匠埴輪試論」『日本歴史』 336 pp.60-74
基峰修 2017「文献と埴輪・壁画資料から見た牛甘（飼）」『人間社会環境研究』 34 pp.77-98 金沢大学大学院人間社会環境研究科
斉藤国夫 1989「埼玉県行田市酒巻 14 号墳の埴輪配列について」『古代』 87 pp.172-188
佐々木憲一・忽那敬三編 2015『舟塚古墳 埴輪編』茨城県教育委員会
志田諄一 1970「鳥取部と鳥養部」『遠藤元男博士還暦記念 日本古代史論叢』 pp.177-203
杉山晋作・井上裕一・日高慎 1997「古墳時代の横坐り乗馬」『古代』 103 pp.157-186
瀧川政次郎 1971「猪甘部考（上・下）」『日本歴史』 272・273 pp.77-99・pp.108-123
東京国立博物館 1986『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇（関東Ⅲ）』
南雲芳昭 2019「人が乗る馬形埴輪」『日本一の埴輪県 集まれ！ぐんまのはにわたち』 pp.128-133 群馬県立歴史博物館
日高慎 2013「「公の芸術作品」だった人物埴輪」『新発見週刊日本の歴史 09』 pp.30-32 朝日新聞出版
日高慎 2015『東国古墳時代の文化と交流』雄山閣
日高慎 2016「古墳時代の女性像と首長」『総合女性史研究』 33 pp.30-43
若松良一 2008「魚形埴輪の出現背景」『埴輪の風景』 pp.225-231 六一書房



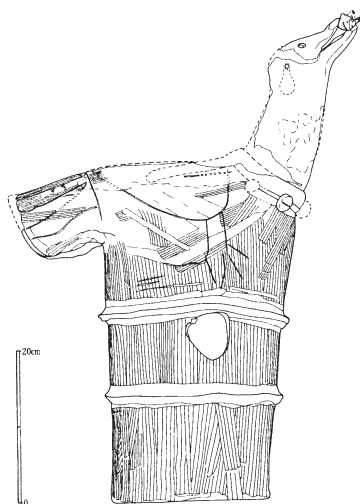
鶏：正福寺1号墳



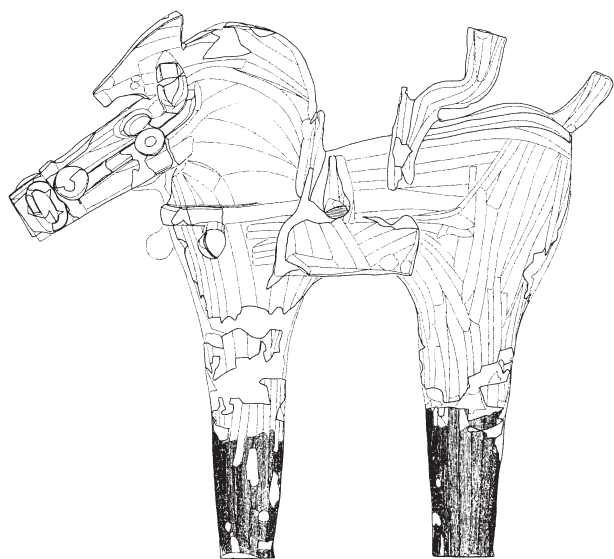
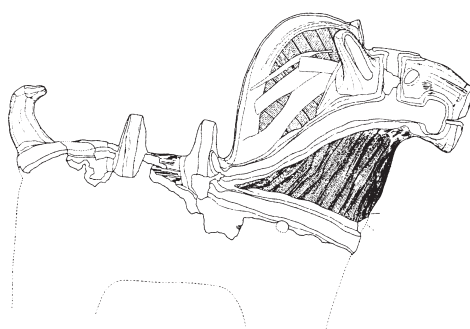
水鳥：埼玉瓦塚古墳



鶴飼い：保渡田八幡塚古墳



馬：正福寺1号墳

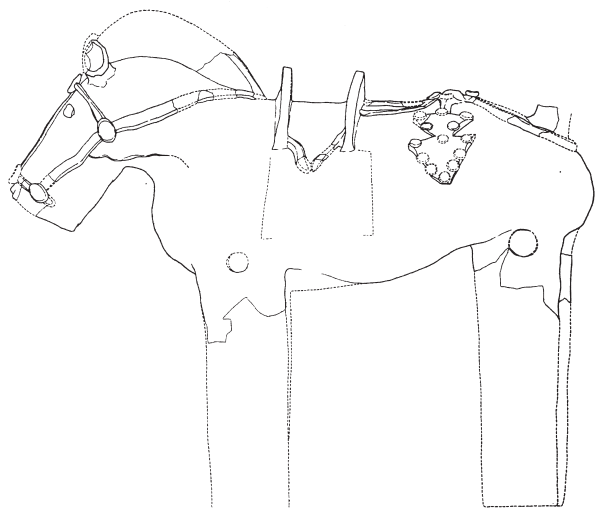
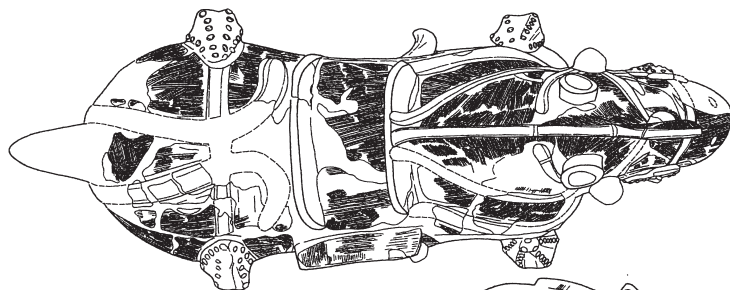
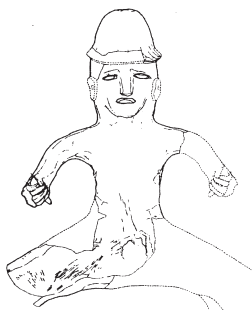


馬：酒巻14号墳

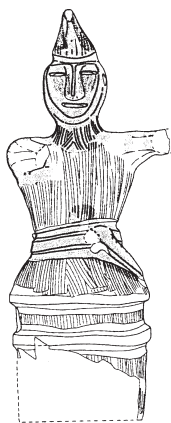
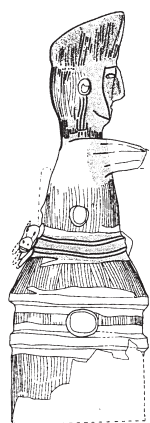


鷹飼い：オクマン山古墳

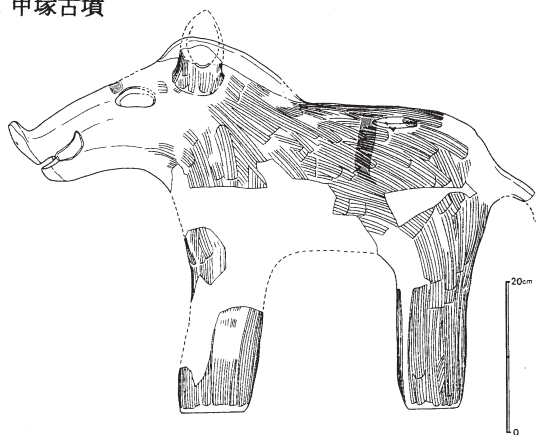
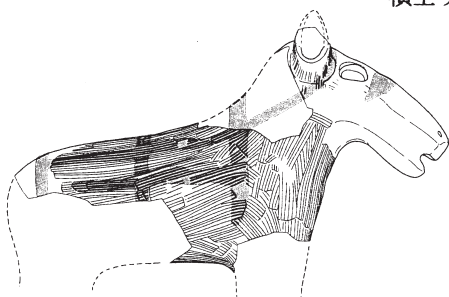
第1図 各種の動物埴輪1 (鶏・水鳥・鶴飼い・鷹飼い・馬)



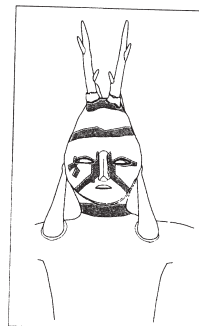
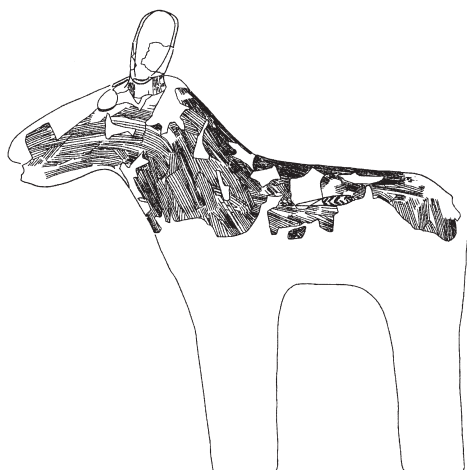
騎馬：矢田野エジリ古墳



横坐り馬：甲塚古墳



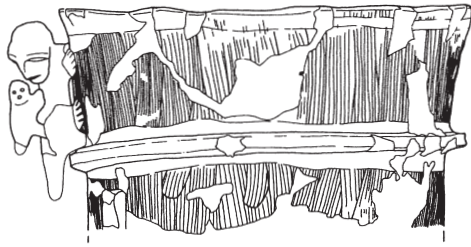
狩猟場面（猪狩）：保渡田Ⅶ遺跡1号墳



狩猟場面（鹿狩）：太子塚古墳

鹿の被り物：千種B3号墳

第2図 各種の動物埴輪2（騎馬・横坐り馬・狩猟・鹿の被り物）

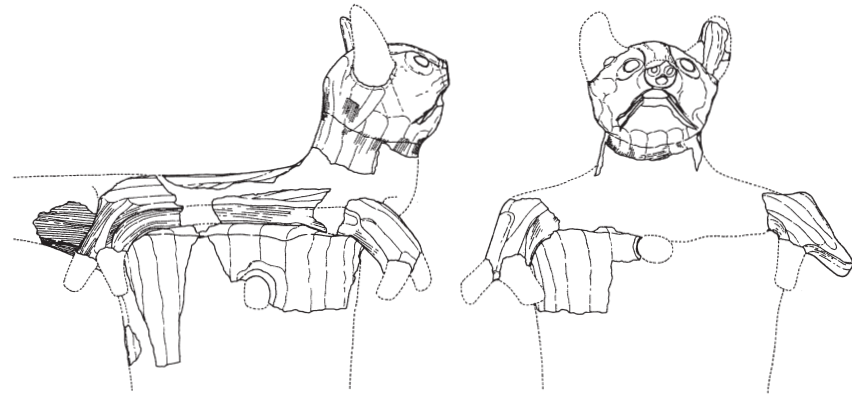


0 1/5 25cm



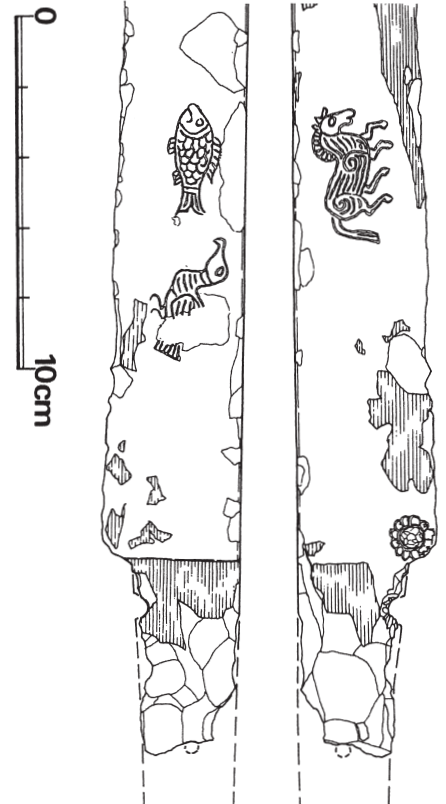
0 1 / 3 10cm

猿と犬：後二子古墳



ムササビ：正福寺1号墳

0 20cm



象嵌大刀：江田船山古墳

第3図 各種の動物埴輪3と象嵌大刀(猿と犬・ムササビ)